



平安だより

世田谷平安教会付属平安幼稚園
2017年 12月号

「神が人として生まれた、クリスマス」

牧師・園長 長村亮介

「マリアは、… 初子を布にくるんで、かえばおけの中に寝かせた」。どうしてゆりかごの中に寝かせなかったのでしょうか。腰掛けの上、あるいは地面の上に、どうして寝かせなかったのでしょうか？ そこにはゆりかごも、腰掛けも、テーブルも、いえ、板切れ一つなく、ゆりかごになりそうなものといえ、かえばおけがあるばかりでした。このかえばおけが世界の王の最初の王座になったのです。下男も下女もない牛小屋の中に、全世界のつくり主が眠っておられたのです。そしてこの牛小屋で十五歳のおとめが、水も、火も、あかり一つさえなしに、初子を生みおとしたのです。なんとこのようなみだぐましい光景ではありませんか！ マリアとヨセフが次にどんなことをしたか、それは誰にもわかりません。学者たちは二人がみどりごをおがんだと言っています。このみどりごが神の子であると考えて、かれらはおどろきを禁じえなかったにちがいありません。このみどりごはまた、ほんとうに赤ん坊らしい赤ん坊でした。マリアは世の母親とはちがうという人たちには、降誕の喜びはとうてい理解できないでしょう。イエスは正真正銘、人間の赤ん坊でした。肉と血をそなえ、手と足のある赤ん坊でついで、よく眠り、泣き、罪がまったくないという点をべつにして、およそ赤ん坊のすることはみなやつてのけました。

マリアはただきよらかなおとめだったというだけではありません。かの女は主のおん母でありました。みどりごをだきよせる前に、マリアはかれをおのく手でうやうやしく寝かせました。かの女の信仰が告げたのでした。「これこそ、いと高きものの御子である」と。他の人は一人としてこのような信仰をもちませんでした。ヨセフですらも。ヨセフも天使のみ告げを受けてはいましたが、そのことばは母なるマリアの場合のように、心の底までさしつらぬきはしなかったのですから。

それゆえわたしたちは主の降誕のことを、私たち自身の赤ん坊の場合のように、まざまざと目の前に見るように、静かに考えてみようではありませんか。わたしはあなた方に、キリストの神性やその威厳についてでなく、みどりごイエスについて考えていただきたいと思えます。いといけないイエスをごらんさない。神性は人をおのかせます。言いつくしがたい神の威厳は人をうちくだします。だから、キリストは罪をのぞいて人間性のすべてをまわられたのでした。わたしたちをおそれおのかせずに、愛と恵みによつて慰めるため、力づけるために。

（マルティン・ルター『クリスマス・ブック』

R. ペイントン編 中村妙子訳）

今年には宗教改革五百年を記念する年のクリスマスなところをご紹介しました。クリスマスで大切なことは神が私たちと同じ肉と血を持つ人間としてお生まれになったことです。私たちはともすると、クリスマスをイエスという偉大な人物の誕生日として祝いがちですが、実はクリスマスほど偉大な神の奇跡は他にはないのです。全能の創造主である神の独り子が、私たちと同じ肉と血をもつて、しかも全く無力な赤ん坊としてお生まれになったというのです。これは小さなコップの中に世界の全部の水が入ってしまう以上に私たちが峻厳なる神のままでの奇跡です。そしてもし主イエスが峻厳なる神のままでこの世にいられたら、心に罪のある私たちが人間の存在は赦されぬでしょう。しかし主イエスは、私たちが被造物と同じ血肉をもつて生まれ、私たちの悲しみや苦しみを共にして下さいました。主イエスがお生まれになったので、私たちが苦しい時も悲しい時も一人ではなく、イエス・キリストを信じる信仰によつて、神さまが共にいてくださるという力強い慰めをいただくことができるのです。クリスマスはみんなでお祝いするのが、もちろん楽しいです。でもその中に、たとえ孤独があったとしても一人ではない。それがクリスマスです。